



特定ケア看護師×緩和ケア認定看護師の 展望

横須賀市立うわまち病院 総合診療センター 清雲聡子

はじめに

私は緩和ケアを担うものとして「患者を全人的に看たい・診たい」という思いから特定ケア看護師を目指しました。緩和ケア専従看護師として活動する中で、がん患者のみならず、心不全や呼吸不全患者、ICUなどのクリティカル領域の非がん患者にも、多く介入させていただきました。特に当院ICUでは急性重症患者の終末期へ介入することが多く、病状や予後予測などの理解、倫理的問題の解決などに難渋しました。このようなケースでは多職種カンファレンスが開催され、患者にとって最善の医療を協働して考える機会が多くありました。この経験から患者を全人的に理解し、患者中心のチーム医療につなげ、さらに盛り上げたいと一念発起し特定ケア看護師を目指しました。

活動報告

1. 迅速対応システム (Rapid Response System: RRS)

現在、臨床研修を修了し、この春から総合診療センターに配属されました。主な業務として、病棟患者管理、新患外来診療、RRSを指導医のサポートを受けながら行っています。RRSでは修正早期警戒スコア (Modified early warning score: MEWS)^{*1}を活用し、急変リスクの高い患者を拾い上げ、問診、身体診察から急変リスクをアセスメントし、病棟スタッフと情報共有します。急変リスクが高いと判断した患者はRRSメンバーと再度回診し、情報共有およびリスクの再評価をします。この急変リスクの高い患者

の中には、治療方針がカルテ上明確でない患者や、コード未設定である終末期患者も多く見受けられます。このようなケースでは、主治医に治療方針を確認し病棟スタッフと共有したり、アドバンス・ケア・プランニング (Advance Care Planning: ACP) を実施し、患者の意向を確認、気管挿管など患者の望まぬ医療が提供されないよう、主治医へつなぐケースもあります。次に、RRSで関わった1症例をご紹介します。

A氏、60歳代女性、MEWS4点でリスク分類中等度。胃がん、多発肝転移、腹膜播種の診断で、5日後にセカンドオピニオン受診のため退院を予定していました。病棟スタッフより、入院当初に比べADL低下、食思低下、傾眠傾向など全身状態が低下しているとの情報がありました。コードに関するカルテ記載はありませんでした。問診、身体診察、血液検査データなどから多臓器不全の状態にあり、急変リスクが極めて高い状態と判断しました。患者は「できる治療は受けたい」という希望でしたが、病棟スタッフおよび主治医にコンタクトを取り、急変時の患者・家族の意向の再確認と明確なコード指示を依頼したところ、患者・家族の意向は、急変時の延命治療は望まず、積極的な治療が難しければ当院で最期の時間を過ごしたい、とのことでした。患者・家族の望まぬ医療が提供されないよう働きかけることができた1例でした。

2. コロナ病棟での勤務

昨年度冬季は、コロナ病棟患者の重症化に伴



ICUスタッフと総診ICUサポートチームで結束の1枚

い、重症患者管理のサポートとしてコロナ病棟に配置されました。当院ではスタッフの負担を鑑み、一定期間での入れ替え制でした。そのため、病棟スタッフは慣れない対象、環境、仲間と業務に当たり、ストレスや孤独感を感じていました。さらに、コロナ感染患者の看護には時間的制約があり、十分なケアができない、十分に話を聞くことができないなど、普段の当たり前のケアが満足に提供できないジレンマや不安全感を抱いていました。この状況から、特定ケア看護師×緩和ケア認定看護師としての役割は、病棟スタッフとその家族を感染させないことを大前提に、スタッフの働き方を考えることや身心のケアを行うこと、主治医・病棟スタッフと患者情報を共有する場を設けること、患者の急変リスクをアセスメントし備えること、患者の意向を確認すること、チーム医療の推進により多角的な視点で患者を理解すること、と考えました。

これらの活動では、特に病棟スタッフや患者に関わる多職種スタッフとのコミュニケーションやディスカッションの機会を大切にしています。患者の病態や患者・家族にとっての最善の医療・ケアを共に考えることなどを通して、教育および医療・ケアの質の向上に寄与していると考えています。これは、緩和ケアのマインドを持った特定ケア看護師ならではのであると自負しています。

今後の展望

特定ケア看護師×緩和ケア認定看護師としての私の夢は、患者・家族の望む医療が提供される医療体制を整えることです。そのためには、当院にACPの文化を根付かせ、ACPが医療の一部になり、患者が医療を選択する時代にすること、またチーム医療の質を向上させることが必要です。夢の実現に向けて、日々の活動を大切に、邁進していきたいと思っています。

特定ケア看護師として、まだまだ努力が必要であると痛感する日々です。しかしながら、以前と比べより多くの患者、スタッフと関わる機会が増え、活動の場も広がっています。これは、ご指導ご支援いただきました多くの方々のおかげと、大変感謝しております。

今後も、特定ケア看護師の魅力を発信していくことで、一人でも多くの仲間が誕生し共に現場で活躍できることを願っています。

※1：バイタルサインを点数化し急変を予測するツール